

『純粹理性批判』の言語分析哲学的解釈：
カントにおける知の非還元主義

KONDO, Shu / 近堂, 秀

(発行年 / Year)

2016-03-24

(学位授与番号 / Degree Number)

32675乙第218号

(学位授与年月日 / Date of Granted)

2016-03-24

(学位名 / Degree Name)

博士(哲学)

(学位授与機関 / Degree Grantor)

法政大学 (Hosei University)

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00013059>

博士学位論文
論文内容の要旨および審査結果の要旨

氏名	近堂 秀
学位の種類	博士（哲学）
学位記番号	第 587 号
学位授与の日付	2016 年 3 月 24 日
学位授与の要件	本学学位規則第 5 条第 1 項(2)該当者(乙)
論文審査委員	主査 教授 牧野 英二 副査 教授 菅沢 龍文 副査（外部） 国士舘大学教授 木阪 貴行

『純粋理性批判』の言語分析哲学的解釈－カントにおける知の非還元主義－

1. はじめに

本研究は、18 世紀ドイツの哲学者、イマヌエル・カント（Immanuel Kant,1724-1804）の主著『純粋理性批判』（*Kritik der reinen Vernunft*,1781/1787）を言語分析哲学的観点から解釈する試みである。近代哲学の定礎者とも呼ばれるカントの批判哲学の代表的な著作『純粋理性批判』については、その刊行後 200 年以上に及ぶカント哲学の研究史および膨大な研究文献のうちで、現代に至るまで優れた哲学者やカント研究者による批判や評価が最も集中してきた書物である。

本研究は、現代哲学の諸潮流の中で、最も有力な哲学的潮流に属する言語分析哲学の立場やその影響を強く受けた英米圏やドイツ語圏の『純粋理性批判』の研究状況のなかで、主要な論争や議論にかかわる方法的観点に依拠して、カント批判哲学の今日的意義を積極的に擁護しようとした独創的で意欲的な論考である。本研究は、カントの超越論哲学が現代哲学の諸潮流、特に言語分析哲学の立場によって乗り越えられ不要となったという批判に対してカント研究者として言語分析哲学的解釈方法を活用して本格的な反論を試みている。また本研究は、汗牛充棟の感ある膨大な量のカント文献を、国内の文献は言うまでもなく特にドイツ語圏や英語圏の最新文献を精力的に調査し吟味・検討を加え、その研究成果を踏まえて『純粋理性批判』の今日的意義を解明するというカント研究史を踏まえた手堅い研究方法を採用している。

本研究の主要な骨格をなす諸論考は、その主要な部分が斯学の最も権威ある日本哲学会編『哲学』、日本倫理学会編『倫理学年報』、日本カント協会編『日本カント研究』（2 編）など全国規模学会の査読論文からなり、加えて『理想』（理想社）および法政哲学会編『法政哲学』、『法政大学文学部紀要』、法政大学言語・文化センター編『言語と文化』、『法政大学大学院紀要』などに収録された諸論考を大幅に加筆・修正して、学位請求論文の目的に

相応しく全体としての統一性を構築し、論述の一貫性を確保したものである。

本研究の基本構成は、以下の目次のように序論および本論9章そして結論からなる。

2. 論文の研究目的と考察方法

本研究の目的は、イマヌエル・カントの主著『純粋理性批判』（第一版一七八一年、第二版一七八七年）をめぐる三つの課題を解明することにある。

第一の課題は、カントの『純粋理性批判』における「超越論的論理学(transzendente Logik)」と「超越論的心理学(transzendente Psychologie)」では、外的世界についての知、他人の心についての知、自分の心についての知という三種類の知識が、相互に還元不可能な関係にあることを明らかにする。第二の課題は、『純粋理性批判』における超越論的心理学による物と心の一元化が、非還元的な知のあり方に関して、ドナルド・デイヴィドソンの非法則的一元論との間に構造的共通性があることを明らかにする。第三の課題は、『批判』の超越論的論理学によるカントの「外在化プロジェクト(Externalisierungsprojekt)」の意味を解明し、そこに判断の意味に関して、デイヴィドソンの实在論的な意味理論との間に構造的共通性がみられることを明らかにする。

ところで現代の言語分析哲学の研究領域では、カントの『純粋理性批判』の研究は、古典的な哲学史研究に属すると見られてきた。それどころか『純粋理性批判』の内在的な研究は時代遅れで、言語分析哲学との関連を問う『純粋理性批判』の研究には、積極的な成果は期待できないと見られてきたように思われる。したがって『純粋理性批判』の「超越論的論理学」と「超越論的心理学」に焦点を絞って、本研究を遂行することには、多くの疑問が提起されることが予想される。哲学史の通説によれば、言語分析哲学は、カントが十分議論してこなかった心の存在と言語の意味、知のあり方、自由と因果必然性の関係などについて影響力ある議論を展開している。もっとも、筆者の見解によれば、言語分析哲学では知を自然科学に限定しようとする還元主義が支配的である。これに対して本研究は、哲学史の通説とは異なり、上記の課題を解明することによって後述のようにカントの「超越論哲学(Transzendental-Philosophie)」における自己意識のあり方をデイヴィドソンの「三角測量(triangulation)」の議論における自己知のモデルとして解釈することが可能であり、それによって知の非還元主義が基礎づけられる可能性を提示する。

本研究は、言語分析哲学の方法に依拠した研究者によるカント解釈および批判の諸成果を活用しつつ、筆者独自の観点から『純粋理性批判』の新たな解釈を試みている。この試みによって本研究は、カントの超越論哲学における知の非還元主義的なあり方がデイヴィドソンの非還元主義の基礎を形成しようという可能性への道筋を提示する。以上のような斬新で独創的な解釈に基づいて、筆者は、カントの主著『純粋理性批判』を言語分析哲学的立場およびその批判的観点から考察する新たなカント解釈の視点とカントの超越論哲学の今日的意義を明らかにする。

上記の研究目的を達成するために、本研究は、次の考察方法によって論述展開を試みる。

第一に、現代哲学における『純粋理性批判』解釈の論争状況とその課題を指摘するために、従来の研究では消極的に扱われてきた超越論的論理学の心理学的な側面を検討する。第二に、『純粋理性批判』の自己意識論を現代の心の哲学との関連からカントの超越論的心理学として積極的に解釈するために、超越論的分析論の超越論的演繹と超越論的弁証論の誤謬推理章を検討する。第三に、『純粋理性批判』の超越論的論理学を實在論的な意味の理論として解釈するために、近年の言語分析哲学の論争状況に立ち入って、カントの超越論哲学の立場からその問題を検討する。このようにして筆者は、物自体と現象とを区別する形而上学的二元論には依拠せず、『純粋理性批判』超越論的分析論と超越論的弁証論の自己意識論を重点的に検討する方法によって考察を進める。この考察方法によって、はじめてカントの超越論哲学とデイヴィドソンの見解との構造的共通性を指摘することができる。同時に、この試みは、デイヴィドソンの非還元主義を基礎づけることになるような、カントの超越論哲学解釈の可能性を提起している。それによって本研究は、『純粋理性批判』の新たな解釈の可能性を明らかにする。

3. 論文構成

本研究の構成は、次の三部九章からなる。第一部は、『純粋理性批判』の超越論的論理学の心理学的側面の解釈に着目して、現代哲学における『純粋理性批判』解釈上の問題を指摘する。従来の解釈では、『純粋理性批判』の超越論的論理学の心理学的な側面が切り捨てられてきた。筆者の見るところ、そこに現代哲学のカント解釈上の問題点がある。第一章は、ストローソンの解釈とそれに対する批判、カッシーラーとハイデガーの解釈のいずれにおいても、『純粋理性批判』の超越論的論理学の心理学的な側面が消極的にしか扱われなかった問題点を検討する。第二章は、カントによる合理的心理学と経験的心理学の否定的見解から『純粋理性批判』の反心理学的解釈の展開へと至る歴史的過程を最近の研究成果を踏まえて辿り、その延長線上にあるガイヤーの解釈を検討する。

第二部は、現代の心の哲学との関連からカントの超越論的心理学の位置づけと意義を明らかにする。現代の心の哲学の文脈から『純粋理性批判』を読み直す試みには、『純粋理性批判』がどのように位置づけられるかについて解釈上の対立があり、その妥当性が問われなければならないからである。第三章は、『純粋理性批判』超越論的弁証論の誤謬推理章における第一誤謬推理批判の内容を検討し、心の哲学との関連からカントの超越論的心理学として『純粋理性批判』の自己意識論を位置付け、キッチャー、ブルック、アメリカスの解釈を立ち入って吟味・検討する。第四章は、第二誤謬推理批判の内容を検討し、それとの関連から言語分析哲学における自己知の議論について上記の研究者に加え、チザムやカスタニューダ、シューメイカー等との論争を批判的に考察する。第五章は、第三誤謬推理批判の内容を検討し、パーフィット、スウィンバーン、ベネット、シューメイカー等の諸説を手がかりに人格同一性の現代的議論との関連を踏まえてカントの見解を考察する。第六章では、さらに第四誤謬推理批判の内容を検討し、シュトウルマ説を手がかりにして

カントの超越論的心理学と心身問題にかかわるデイヴィドソンの非法則的一元論との構造的な共通性を明らかにする。

第三部は、言語分析哲学の意味の理論との関係からカントの超越論的論理学と超越論的心理学の意義を明らかにする。言語分析哲学による『純粹理性批判』への接近の試みでは意味論的解釈が試みられたが、さらに超越論的心理学によってその一面性が修正されなければならないからである。これらの試みによって第三部では、カントとデイヴィドソンの両者が「外在化プロジェクト」における非還元主義的一元論の立場を採っていることを明らかにする。第七章は、『純粹理性批判』の意味論的解釈と超越論的論理学の記号論的再構成の解釈を検討し、『純粹理性批判』第二版超越論的分析論における超越論的演繹前半の議論に即して、バツツ、ホグレーベ、シェーンリッヒ等の解釈を手がかりにして言語記号の使用と意味の前提条件を考察する。第八章は、超越論哲学の変換をめぐる現代の論争状況を吟味・検討し、第二版における超越論的演繹後半の議論に即して、クリプキ説や、シェーンリッヒの超越論的記号論の研究を参照しつつ、言語の公共性の前提条件を考察する。第九章では、主としてストローソンの解釈とハナの解釈を検討し、カントの超越論的論理学とデイヴィドソンの實在論的な意味の理論との構造的な共通性を明らかにする。

以上の考察によって、本研究では、カントが主張する自己意識のあり方をデイヴィドソンの三角測量の議論における自己知のモデルと重ね合わせて解釈することが可能であり、両者の間に知の構造的共通性が存在することを明らかにする。筆者は、この解釈に基づいて、カントの超越論哲学の立場から外的世界についての知、他人の心についての知、自分の心についての知という三種類の知識が相互に還元不可能な関係にあることを解明し、併せてデイヴィドソンの非還元主義的な解釈とカントの超越論哲学の解釈との新たな関係の可能性を示唆する。これらの考察によって本研究は、『純粹理性批判』の論述で展開されたカントの哲学的思考とその方法の新たな意義を解明する。

4. 論文の目次

凡例

初出一覧

序論

- 一 本研究の目的
- 二 『純粹理性批判』研究の現状と課題
- 三 本研究の考察方法
- 四 本研究の構成

本論

第一部 現代哲学における『純粹理性批判』解釈の問題

第一章 『純粹理性批判』の二面性

第一節 超越論的論理学の心理学的な側面

第二節 超越論的心理学の「想像上の主題」

(1)空間と時間のアプリアリ性

(2)総合の主観性

第三節 認識論的解釈と存在論的解釈

第四節 超越論的心理学の発見としてのコペルニクスの転回

第二章 『純粹理性批判』と心理学との関係

第一節 ヴォルフ学派における魂の形而上学

第二節 カントによる心理学の否定と魂の消去

第三節 『純粹理性批判』の反心理学的解釈の展開

第四節 認知科学の機能主義から超越論的心理学の自己意識論へ

第二部 心の哲学としての超越論的心理学

第三章 超越論的心理学の自己意識論

第一節 カントと言語分析哲学における心の問題

第二節 『純粹理性批判』の自己意識論

第三節 理性批判における自然主義と反自然主義の対立

(1)キッチャーの解釈

(2)ブルックの解釈

(3)アメリクスの解釈

第四節 「思考する私」の主観としての意味

第五節 現代の心の哲学に対する超越論的心理学の批判

第四章 自己知と超越論的主観

第一節 カントと言語分析哲学における自己知の問題

第二節 一人称代名詞と自己知

第三節 直接的な自己知は可能か

第四節 「思考する私」の質的単一性の意味

第五節 自己の超越論的な表示

第五章 人格同一性と超越論的主観

第一節 カントと人格同一性に関する現代的論争

第二節 人格同一性の基準と経験の主観

(1)還元主義的見解

(2)中立的見解

(3)二元論的見解

第三節 理性批判における人格概念は非還元的か

第四節 「思考する私」の数的同一性の意味

第五節 経験的人格の前提としての超越論的主観

第六章 カントの非法則的一元論

- 第一節 カントとデイヴィドソンの非法則的一元論
- 第二節 第四誤謬推理批判における反デカルト的議論
- 第三節 「物と心」から「自然と自由」へ
- 第四節 意識経験と超越論的主観
- 第五節 心的出来事としての内的経験

第三部 意味の理論としての超越論的論理学

第七章 言語の意味と超越論的客観

- 第一節 カントと言語分析哲学における意味の問題
- 第二節 真理の規準の学としての超越論的論理学
- 第三節 構文論の規則と意味論の規則
- 第四節 超越論的記号論における記号の使用と意味の規則
- 第五節 自己の外部の超越論的な表示

第八章 思考の客観性、言語の公共性と超越論的統一

- 第一節 現代の超越論哲学における私的言語の問題
- 第二節 コミュニケーション共同体と超越論的自由
- 第三節 経験の自己帰属の可能性と理性による「自己次元化」

(1) ストローソンの超越論的論証

(2) シェーンリッヒによる懐疑的パラドクスの解決

- 第四節 超越論的演繹による私的言語の否定
- 第五節 三角測量と超越論的統一による知の構造

第九章 カントの外在化プロジェクトの射程

- 第一節 意味論のコペルニクスの転回
- 第二節 概念の客観性と有意味性の超越論的条件
 - (1) ストローソンの原則論解釈
 - (2) ガイヤーのストローソン批判
- 第三節 一般的認知意味論と認知の理論における外在化プロジェクト
- 第四節 実在論的な意味の理論の基礎づけ可能性

結論

注

参考文献一覧

5. 初出一覧

第一章 「純粹直観としての空間・時間の根源性」(『法政大学大学院紀要』第四一号、一九九八年、所収。)

「超越論的演繹と純粹統覚についての覚書」(法政大学大学院人文科学研究科哲学専攻編『哲学年誌』第三〇号、一九九九年、所収。)

- 第二章 「心の存在と非存在—近代啓蒙思想の「こころ」の学—」（『理想』第六七二号、二〇〇四年、所収。）
「カントの自己意識論と認知科学」（法政哲学会編『法政哲学』第五号、二〇〇九年、所収。）
- 第三章 「カントの「心の哲学」」（『法政大学文学部紀要』第五〇号、二〇〇五年、所収。）
- 第四章 「言語分析哲学における自己知と超越論的主観」（『法政大学文学部紀要』第六八号、二〇一四年、所収。）
- 第五章 「人格同一性と理性の自己認識」（日本倫理学会編『倫理学年報』第五六号、二〇〇七年、所収。）
- 第六章 「カントにおける心身問題」（日本哲学会編『哲学』第六一号、二〇一〇年、所収。）
- 第七章 「カントにおける規則の正当化の問題」（日本カント協会編『日本カント研究2』、二〇〇一年、所収。）
- 第八章 「私的言語論とカント」（日本カント協会編『日本カント研究4』、二〇〇三年、所収。）
- 第九章 「カントの外在化プロジェクト」（法政大学言語・文化センター編『言語と文化』第一号、二〇一四年、所収。）

6. 本研究の成果

本研究は、イマヌエル・カントの名著『純粋理性批判』（以下、『批判』と略記する）の言語分析哲学的解釈によって次の三点を解明した。第一に、カントの超越論的論理学と超越論的心理学では、外的世界についての知、他人の心についての知、自分の心についての知という三種類の知識が相互に還元不可能な関係にある。第二に、カントの超越論的心理学による物と心の一元化には、知の非還元的なあり方に関してデイヴィドソンの非法則的一元論との間に構造的共通性があることを明らかにした。第三に、カントの超越論的論理学による外在化プロジェクトには、判断の意味に関してデイヴィドソンの実在論的な意味の理論との間に構造的共通性がある。筆者は、本研究の成果として、カントの超越論哲学の立場から心的なもののトークン同一説、意味の理論における外在主義、知の非還元主義という三つの見解を提示した。

本研究の第一部は、カント哲学への反動という二十世紀哲学以降の動向のなかで、改めて『批判』を読み直す重要性を示した。筆者は、従来の『批判』解釈では超越論的論理学の心理学的な側面が切り捨てられてきた点に、言語分析哲学が見逃してきた課題を指摘した。

第一章は、ストローソンの解釈とそれに対する批判、カッシーラーとハイデガーの解釈を検討した。ストローソンは、純粋直観と純粋悟性概念の論理的な意味を重視する一方で、心理学的な意味を素通りする。これに対してアリソンは、心理学的な意味を認識論に

おける人間の有限性の前提条件として読み換える。筆者の見解によれば、いずれの解釈も一面的なものに留まる。『批判』の超越論的論理学は、主観の形式に根拠を求めるところに独自性がある。しかし、ストローソンもアリソンも、さらに遡ってカッシーラーもハイデガーも、その独自性を積極的には評価せず、心理学的な側面を切り捨てようとする点では共通する。こうした従来解釈に対して筆者は、『批判』の超越論的論理学の心理学的な側面の重要性を示した。

第二章は、カントによる魂の消去から『批判』の反心理学的解釈の展開へと至る歴史的過程を辿り、その延長線上にあるガイヤーの解釈を検討した。ガイヤーによれば、ヒュームとテーテンスの心理学を基準とすると、カントの超越論的演繹は心理学的な議論とは見なされえない。しかし、筆者の考えでは、超越論的演繹における自己意識とその統一という概念は、言語分析哲学で問われている心の存在について考察するための手がかりとなる。このように指摘して筆者は、言語分析哲学における心の存在の問題に対してカントの超越論的心理学の立場から答える方向性を示した。

本研究の第二部は、現代の心の哲学との関連から見た『批判』の位置づけと意義を明らかにした。筆者は、『批判』の自己意識論をカントの超越論的心理学として解釈し、デイヴィドソンの非法則的一元論との構造的共通性を解明した。

第三章は、『批判』誤謬推理章の第一誤謬推理批判の議論を検討し、『批判』の超越論的演繹と誤謬推理批判の自己意識論を現代の心の哲学との関連からカントの超越論的心理学として解釈した。現代の心の哲学の文脈で『批判』を読み直す主要な試みとして、『批判』の自己意識論を構成主義とするキッチャーの解釈、自己意識論を表象主義とするブルックの解釈、非唯物論とするアメリクスの解釈がある。これに対して筆者は、解釈上の論争点として、次の三点が問われなければならないことを指摘した。すなわち、①『批判』の自己意識論は還元主義的であるか、中立的であるか、非還元主義的であるか。②『批判』の自己意識論で示されているのは人格同一性の認知的基準であるか、非帰属的な自己指示であるか、人格同一性の合理主義的基準であるか。③現代の心の哲学の枠組みのなかで解釈された『批判』の自己意識論はどのような意味で超越論的であり、そこから引き出される見解は構成主義と表象主義、不可知論と非唯物論のいずれに位置づけられるか。筆者は、カントが超越論的心理学として主張する自己意識のあり方によってこれに答えられることを明らかにした。

第四章は、言語分析哲学における自己知の問題との関連から第二誤謬推理批判の議論を検討した。カントは、第二誤謬推理批判では、超越論的心理学の自己意識論に従って魂の単純性を否定すると同時に、超越論的主観の質的単一性を主張する。筆者の考えでは、超越論的主観の質的単一性という自己の超越論的な表示によって、チザムが主張する直接的な自己知のあり方が退けられる。その一方で、シューメイカーが主張する同定によらない自己指示という自己知のあり方が可能となる。このように指摘して筆者は、言語分析哲学

における自己知の問題に対して、カントの超越論的心理学に従って自己の超越論的な表示が一人称代名詞「私」を使用する前提条件であることを明らかにした。

第五章は、人格同一性に関する現代的論争の問題との関連から第三誤謬推理批判の議論を検討した。カントは、第三誤謬推理批判では、超越論的心理学の自己意識論に従って魂の人格性を否定し、超越論的主観の数的同一性を主張する。筆者の考えでは、カントの主張は、人格同一性に関する現代的論争のなかではシューメイカーの中立的見解の立場に位置づけられる。このように指摘して筆者は、人格同一性の現代的論争の問題に対して、カントの超越論的心理学に従って経験的人格の同一性には客観性が要求されることを明らかにした。

第六章は、現代の心身問題との関連から第四誤謬推理批判の議論を検討し、それを解決する一つの方向性を明らかにした。カントの超越論的心理学には、一人称言明の前提条件に従って心的な動詞の意味を社会的・歴史的な文脈で探る可能性が示唆されている。このように指摘して筆者は、物的出来事と心的出来事を区別するデイヴィドソンの非法則的一元論とカントの超越論的心理学との構造的共通性を解明した。同時に筆者は、第三章で指摘した三点の問いに対して、カントの超越論的心理学に従って次のように回答を与えることができた。①実体としての魂が超越論的主観に置き換えられ、超越論的主観のもとで物と心が非還元的に一元化される。②超越論的主観として意識される自我に従って、自己の超越論的な表示が同定によらない自己指示を可能にする。③心的なものが実体として認識されるとする二元論とこれを退ける不可知論、あるいは機能として認識されるとする構成主義と表象主義のいずれも一面的である。

本研究の第三部は、言語分析哲学の意味の理論との関連から見た『批判』の位置づけと意義を明らかにした。筆者は、『批判』の超越論的論理学の記号論的再構成を超越論的心理学によって修正し、その結果、デイヴィドソンの实在論的な意味の理論との構造的共通性を解明した。

第七章は、『批判』の超越論的論理学の記号論的再構成を検討し、超越論的客観が言語記号の使用と意味の前提条件であることを明らかにした。シェーンリッヒによる超越論的論理学の記号論的再構成では、言語の使用と意味とが一致する連関点として超越論的客観が想定されている。シェーンリッヒの『批判』解釈に対して筆者は、超越論的客観が超越論的主観と相関関係にあつて、これにより自己の外部が表示されることを明らかにした。

第八章は、超越論哲学の変換をめぐる現代の論争を検討し、超越論的統一が思考の客観性と言語の公共性の前提条件であることを明らかにした。カントによれば、単なる自己と純粹悟性概念からなる統覚の総合的統一は、現象における自己の内的経験と区別する形で外的経験を可能にする。筆者の考えでは、こうした自己意識のあり方は、デイヴィドソンの三角測量の議論における自己知のモデルとして解釈することが可能となる。したがって、カントの超越論的論理学と超越論的心理学では、外的世界についての知、他人の心についての知、自分の心についての知という三種類の知識は、デイヴィドソンが主張するように

還元不可能な関係にある。このように指摘して筆者は、デイヴィドソンの三角測量の議論における知の非還元的なあり方とカントの超越論哲学における超越論的統一という自己意識のあり方との構造的共通性を解明した。

第九章は、ストローソンによる『批判』の原則論の解釈とそれに対する批判、『批判』の分析論を一般的認知意味論として読み換えるハナの解釈を検討した。シェーンリッヒによれば、『批判』の原則論は認知の理論における外在化プロジェクトと見なされなければならない。したがって、カントが原因性概念の適用を明らかにする原則論の議論に依拠するならば、判断の意味は外的状況のなかにあることになる。このように指摘して筆者は、単称因果言明の意味を外的状況に求めるデイヴィドソンの意味の理論とカントの超越論的論理学との構造的共通性を解明した。

以上のように筆者は、カントの超越論哲学における自己意識のあり方をデイヴィドソンの三角測量の議論における自己知のモデルとして解釈した。同時に筆者は、『批判』の言語分析哲学的解釈によって次の三つの見解を提示した。

第一の見解は、現代の心の哲学におけるトークン同一説である。筆者の考えでは、超越論的主観の内で区別される外的経験と内的経験の関係は、デイヴィドソンの非法則的一元論における物的出来事と心的出来事の関係として解釈することができる。このように指摘して筆者は、カントの超越論的心理学から、物的出来事と心的出来事とが区別されなければならない根拠を第三者的な観点に認める見解を提示した。

第二の見解は、言語分析哲学の意味の理論における外在主義である。筆者の考えでは、概念の直観への超出を判断に求める超越論的真理は、デイヴィドソンの實在論的な意味の理論における真理条件として解釈することができる。このように指摘して筆者は、カントの超越論的論理学から、判断と事実とが対応しなければならない根拠を原因性概念の適用に認める見解を提示した。

第三の見解は、言語分析哲学における知の非還元主義である。カントの超越論哲学によれば、統覚の総合的統一という自己意識のあり方は、内的経験と区別する形で外的経験を可能にする。デイヴィドソンの三角測量の議論によれば、外的世界についての知、他人の心についての知、自分の心についての知という三種類の知識は、相互に還元不可能な関係にある。筆者の考えでは、カントの超越論哲学における自己意識のあり方は、デイヴィドソンの三角測量の議論における自己知のモデルとして解釈することができる。このように指摘して筆者は、デイヴィドソンが主張する知の非還元的なあり方の根拠をカントの超越論哲学における自己についての知に認める見解を提示した。

本研究は、カント研究者が『批判』から逸脱するかあるいは『批判』に留まるのみであった従来の解釈に対して、『批判』のテキストに即して言語分析哲学的解釈の方法を利用することで、カント超越論哲学の積極的意義を明らかにした。このようにして、カントの心の哲学と意味の理論では、自己知に基づいて知の非還元主義が主張されうることを解明したのである。

7. 本研究の総合評価

以上の研究は、テーマ設定や考察方法、そして論述および内容から見て多くの卓越した見解と独創的な論点を提示することに成功した。その主要論点は、次の四点に集約される。

第一に、近堂論文は、現代哲学、特に言語分析哲学、心の哲学の領域にまで大きな影響を及ぼしてきた18世紀ドイツの哲学者・カントの主著『純粋理性批判』の思想的展開を広範な観点から新しい研究方法によって首尾一貫した理論として吟味・検討し、積極的に評価しようと試みた研究の成果である。近堂論文は、カントの主著およびその思想的展開を現代哲学の論争的状况を的確に把握し、諸家の言語分析哲学的解釈を手がかりにして、特にドナルド・デイヴィッドソンとの関連からカントの非還元主義的解釈の特徴を解明しようと試みている。このことによって本論文は、従来の関連研究にはみられない独創的で優れた研究成果を挙げている。

第二に、近堂論文は、国内外の最新の研究成果を踏まえて、新たな分析方法と独自の観点から国内の研究書や邦語の関連文献だけでなく、英語・ドイツ語・フランス語で刊行された膨大な量の研究文献を丹念に調査し批評しつつ、それらを自身の研究テーマの考察と自説の補強材料として活用することに成功している。例えば、本研究のこの特徴は、近代の心理学にかんするハイナー・クレンメの発展史研究の成果を活用している点にも現れている。さらに本研究は、実践哲学的観点から復権してきた超越論的論証にかんする論争点も意識して考察した点でも、日本国内の『純粋理性批判』にかんする多数の研究書を凌ぐ学術性の高い内容の論考である。

第三に、本研究は、『純粋理性批判』の根本思想や重要概念の研究史・解釈上の論争状況の精緻な学説史研究を周到に精査し検討することによって、学説史研究の観点から見ても極めて優れた成果を挙げている。近堂論文は、例えば、超越論的論理学と超越論的心理学との関係について統合的な解釈を提起した。本研究は、この点でも『純粋理性批判』の刺激的で斬新な研究の試みである。また本論文は、学説史研究という手堅い研究成果と的確な把握に基づき、『純粋理性批判』の論争史にかんする主要論点を十分踏まえた上で、『純粋理性批判』研究の立場を保持しつつ言語分析哲学的な立場からのカント批判に応答するという方法的立場から斬新な解釈の提示に成功している。これらの研究成果から見て近堂論文は、日本における『純粋理性批判』研究史における新たな展望を開いた点で注目すべき業績であり、高く評価すべき試みである。

第四に、本研究に見られる欧文献を中心にした関連分野の参考文献の周到な探究と真摯な対話と対決の姿勢は、本論文に顕著な特徴のひとつであり、近堂論文の優れた研究成果の一側面を表している。近堂論文は、難解な先行研究の主要な論述内容を的確に整理し明示した上で、筆者独自の議論との差異化を明確にして、自身のオリジナルな解釈の視点を提示することに成功している。例えば、自己意識論のキッチャーによる構成主義的解釈、ブルックの表象主義的解釈、アメリカスの非唯物論的解釈、シェーンリッヒの超越論的記

号論によるカテゴリー解釈や外在化プロジェクトの主張、ハナによる超越論的分析論を一般的認知意味論として読み換える試み等英米圏やドイツで活躍する研究者のカント解釈との対話および対決の論述展開は大いに刺激的であり、近堂論文は自己や他者の知をめぐる論争にも積極的に自身の見解を対置している。これらの研究および論述方法は、近年の『批判』研究およびその批判的議論のいわば見取り図を提供しており、非常に読み応えのある内容である、と評価できる。本研究は、これらの研究成果によって日本国内の『純粋理性批判』の今後の研究を行なう上で不可欠の必読書となり、斯学の研究にとって大いに貢献するはずである。

もっとも、本研究には、意欲的で斬新な試みに不可避とも言える論述内容の説明や論証の不十分な点、カント理解や言語分析哲学的な考察方法等にかんして疑問点や課題が幾つか残されている。

第一に、カントの超越論哲学と経験的実在論の関係把握については、カント研究者の間でも今日に至るまで『純粋理性批判』研究上の論争点になっており、この課題に対する近堂論文とは異なる見解が複数ある点にもさらなる目配りが必要であったように思われる。特に『純粋理性批判』の第一版と第二版との書き換えに伴い生じた両版における超越論哲学と経験的実在論にかんするカント解釈上の論争点に関連して、カントの経験概念や統覚、意味や実在性、特に内的経験と外的経験との関係の捉え方には、さらなる吟味・検討が求められるであろう。

第二に、この論点とも関連した超越論的主観と超越論的客観との関係、他我や心の問題、身体の問題についても、従来カント哲学の重要な論争点になってきた重要な課題であるだけに、さらなる説明が求められるように思われる。もっとも近堂論文も自覚的に論じているように、これらの課題は、『純粋理性批判』におけるカントの立場を肯定的に評価する内在的な議論の手がかりに活用するという本研究の意図からすれば、問題提起や主要論点の指摘にかんする限り妥当であると言ってよい。だが、本研究の論述展開と考察方法に関して言えば、やや議論を広げすぎた感が否めない。その結果、論述展開が拡散気味の印象を読者に与え、主題の考察の首尾一貫性がやや見えにくくなったことは否定できない。この点についても近堂論文は、さらに立ち入った考察方法および論述の工夫が必要であろう。

第三に、本論文のサブタイトルと関連して、幾つかの疑問点が生じる。本論文は、「カントにおける知の非還元主義」の特徴を明らかにするために、カントの超越論的心理学と心身問題にかかわるデイヴィドソンの非法則的一元論との構造的共通性を明らかにしようと試みた。ところが、カントの哲学的立場とデイヴィドソンの哲学的立場とは多くの点で異質であり、特にデイヴィドソンの「三角測量」にかんするカントとの「構造的類似性」、「知の構造的共通性」にかんする議論について、この異質性の検討にさらに立ち入るべきであったと思われる。言語分析哲学の研究者から見れば、次のような疑問が生じるであろう。例えば、デイヴィドソンの立場から言えば、言語の社会的役割や現実の他者の存在、第二の人物の存在などについて、立ち入った考察が求められるであろう。もっとも、近堂

論文の第六章では、シュトゥルマ説を援用して、他者の観点や個人の意識経験が歴史的・社会的な文脈に依存的な在り方をする点なども考察しており、これらの論点にさらに立ち入って吟味・検討を加え、デイヴィドソンの状況依存的な意味の理論を考察すれば、言語分析哲学の専門家からの疑問に対してより説得力のある論述展開ができたであろう。

最後に、これらの課題や疑問が残る一方で、本研究は、『純粋理性批判』の首尾一貫した積極的な解釈の試みであり、また筆者の狙いは、言語分析哲学的方法を利用することによって『純粋理性批判』の今日的意義を解明することであり、そのための一つの有力な論点として「カントにおける知の非還元主義」とデイヴィドソンの非法則的一元論との構造的共通性を見出した点にある。さらに近堂論文は、シェーンリッヒによる外在化プロジェクトに基づく超越論的主観および超越論的客観の不十分性を検討することによって、現代の心の哲学やそれに関連する諸課題の基礎づけ主義的な可能性とカント哲学の非法則的一元論の論証に現代的意義を見出した点から見て、カント『純粋理性批判』の研究という本論文の目的や意欲的で斬新な研究成果を正当に評価すべきであろう。

したがって、上記の諸課題や疑問点があるにもかかわらず、近堂論文は、その優れた研究成果をいささかも損なうものではない、と確信する。

8. 結論

以上により、審査小委員会は、近堂秀氏提出の博士学位請求論文『『純粋理性批判』の言語分析哲学的解釈－カントにおける知の非還元主義－』を優れた研究であると評価し、博士（哲学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものである、との結論に達した。

以上